

# 墨画小品展と「大菩薩峠」挿絵

## ——新出石井鶴三宛中里介山・西田武雄書簡から

松本和也（信州大学人文学部）

### 一、はじめに

挿絵（画家）の社会的地位——こうした問題設定において、これまでの挿絵史で特筆されてきたのは、たとえば石井鶴三<sup>①</sup>による上司小剣<sup>②</sup>「東京」（一九二二〜一九二三）、中里介山「大菩薩峠」（一九二五〜一九二八）、あるいは木村莊八、河野通勢、山本鼎、川端龍子関わった白井喬二「富士に立つ影」（一九二四〜一九二七）といった大正末年の新聞小説挿絵だろう。時期を考えれば、右に名前をあげた芸術家たちが挿絵に関わったことで、挿絵（画家）の社会的地位といった問題領域が浮上したのだともいえるはずで、そこには挿絵というフィールドとその描き手という要素の、従前とは異なる組み合わせが大きな意味をもっている。

ここで、本稿の視座となる石井鶴三について、大正末年の動向を三木多聞の整理によって確認しておきたい。

ところで、石井鶴三は彫刻をはじめ、素描、油絵、水墨、水彩画、版画、挿絵等、非常に幅広く活躍したマルチ人間であったが、大正末期はそのマルチぶりが最も発揮された時期であった。大正一〇年（一九二二）鶴三は日本水彩画会の会員となり、第八回展に「曲馬」を出品している。翌一一年（一九

二三）小杉未醒、倉田白羊、森田恒友、山本鼎らが発起人となって春陽会が創立され、鶴三は中川一政、椿貞雄、岸田劉生、萬鉄五郎、木村莊八らと共に招かれて客員会員となり、翌年の第一回春陽会展に「耕作」「夜の電車」「浴泉（一）（二）」を出品しているし、大正一一年日本創作版画協会が創立され、その会員となった。このような動きは、鶴三個人の問題というよりも、大正末期の日本の美術界が美術団体の新しい編成段階に達していたことを反映しているが、鶴三個人は、大正一〇年朝日新聞紙上に上司小剣の『東京』（愛慾篇）の挿絵を執筆し、一二年には『東京』（争鬪篇）の挿絵執筆と、新聞小説の挿絵画家としての評価が次第に高まり、それは間もなく大正一四年（一九二五）以後の中里介山『大菩薩峠』の挿絵の大活躍につながるようになった<sup>③</sup>。

このように、鶴三のキャリアとしてみても、大正末年の挿絵は特筆されるところなのだけれど、明治期以降の新聞小説挿絵（史）を考えてみれば、その描き手の多くは社内的人物か、いわゆる職人としての挿絵画家であった<sup>④</sup>。それが、大正中期になると、すでに芸術家（本画家）として一定の評価を得た人々が、挿絵という領域へとその仕事の場を広げていく、いわば地殻変動とも称すべき変

化が生じていくのだ。<sup>5</sup>その帰結として、従前からの挿絵に対する社会的評価と、その描き手および挿絵への（芸術的／社会的）評価のズレが目立つようになり、挿絵画家の社会的地位といった問題領域が挿絵（画家）をめぐる境域から浮上してきたのだ。

こうした動向については、右にもその一端を示した通り、具体的な挿絵画家とその（主には新聞連載小説に添えられた）挿絵をあげ、芸術性に言及しつつ記述されることが多い。もちろん、それが具体的な、現実的な事態の推移を示すものであることは疑いがないが、本稿では、そのようにして制作された挿絵が、再び芸術の場へと差し戻されていったケースに注目してみたい。

ここで想定しているのは、一九二五年二月一五日より一〇日間開催された、墨画小品展である。このイベントの特異性を図式的に整理するならば、すでに芸術家であった人々が、小説の挿絵という新たなフィールドで制作した（新聞や講談雑誌といった大衆向け複製芸術としての）挿絵／芸術作品を、（本画に擬し得る）挿絵原画というかたちで展覧会に掲げるといって、いわば逆輸入のような営為であったといえるだろう。この帰結として、本画と挿絵は並置されることになり、挿絵にもまた高い芸術性が備給されていくことになるし、芸術家としては本画も挿絵もともに、芸術と見做しているというスタンスを表明することにもなる。

また、こうした動向と関わり、挿絵の著作権が問題化されてもいく。「大菩薩峠」の挿絵著作権をめぐる中里介山と石井鶴三が訴訟にまで及んだ「挿絵事件」が大々的に報じられるのは一九三四年のことであるが、その前史・第一幕こそ、この墨画小品展だったのだ。<sup>6</sup>中里介山の主張は、新聞小説の挿絵は、そのアイディア自体が小説（家）に拠るもので、挿絵の独立した著作権は認められない

（挿絵の著作権も原作小説家にある）という極端なものであった。<sup>7</sup>実際、石井鶴三が「大菩薩峠」挿絵の原画を挿絵展に出品した折、中里介山は次のような警告を発してもいる。信州大学蔵「石井鶴三関連資料」から発見された書簡をみてみよう。

1、石井鶴三宛中里介山書簡（仮番号「高1-13」）  
書簡本文の翻字は、以下の通りである。

拝啓

画会の件アナタノ方はトニカク

私の方は大不賛成です。

西田といふ男アレは純然たる書画

屋で営業本位で利用するだけのものです。

一度会つて見ましたが問題になりませ

ん。一旦、約束に違つたやり方を「改ページ」

してゐます。

トニカク、おやりなさるならおやりなさ

い。

小生はドコまでも不賛成で、かりそめにも自己の作物を営業と悪意とに

利用されたことを覚えてゐます。

また小杉氏が講談物などを平気で

執筆する良心の欠けたことをな「不明一字 ミセケチ」げ  
き貴下や木村氏の如き人が、こんな種類「改ページ」

の展覧を甘んずるのを甚だ遺憾と致します。先は

十二月十三日

中里生

石井鶴三様

宛先は、「市外板橋中丸二六六／石井鶴三様」、日付は本文・消印ともに一九二五年二月二三日、消印の時間は午後一〇〜一一時、地名は早稲田。裏面には、「十二月十三日」と日付が記され、左下に「東京牛込早稲田／鶴巻三百／中里彌之助」と朱印で住所が捺されている。

開口一番、「大不賛成」とあり、中里介山の強烈な意志が読みとれ、次節以降、中心的にとりあげていく「西田」＝室内社の西田武雄に対する不信任も多分に混じっていたようである。

もともと、ここには、単に小説（家）と挿絵（画家）との権利関係だけでなく、自作小説の位置づけに関する中里介山の明確な主張・パフォーマンスも重ねられている。というのも、中里介山は自身の小説を高い芸術性をもった独自のジャンルに関するものと考えており、いわゆる大衆小説や講談と並置されるのを、ことのほか嫌っていたのだから。同展に小杉未醒は、講談「清水次郎長」の挿絵を出品している。つまり、優れた芸術である自作小説の挿絵と同時に挿絵展に並べられたのが、講談や大衆小説の挿絵であったことが、中里介山を不快にさせたのだと考えられる。

時期的には少し遡るが、以下、傍証となる書簡を、信州大学蔵「石井鶴三関連資料」から紹介してみよう（もともと、この時期、中

里介山は、書簡文面に示されたように、それまでの共同作業によって培われた鶴三への信頼を失ってはいないようである<sup>8)</sup>。

2、石井鶴三宛中里介山書簡（仮番号「高1-23a」）

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

お手紙拝見原稿の方はつとめてお間に合はせませう。

画会の件も至極おもしろい企と存じまた有益なる刺戟ともなりませうが、小生として一つ打ち

明けて申せば不快な事は報知の白井君といふ

人は小生の模倣ばかりやりたがる人で、それをまた

文壇の或種の尻押しがわざと小生と比較しどち

らがどうかのうのと弥次をやつてゐる心事が日

頃浅ましいと思つてゐる処へ、二つだけ並べて

新らしい試みの画会を開くといふその事が「小生 ミセケチ」

「には不快なのです。ミセケチ」イヤに思ひます。

右と同列でなく、他に□□が加はるか或は

貴下単独でおやりになるならば少しも異議

はございません、木村莊八氏に対しても敬

意を持つて居りますが、たゞ白井といふ人

及びその背後の弥次が大嫌ひなのです。

この点を一つ御考慮願ひたいと存じます

先は取り敢へず早々

不備

大正十四年

九月三十日

中里生  
石井画伯 御中

半紙に書かれたこの書簡には封書がみつかっていない。それでも、本文中に日付が記載されており、文面からもこの書簡が墨画小品展に関わったものであることがわかる。

冒頭の話は、「大菩薩峠」連載原稿（のおそらくは遅延）についての挿絵画家サイドからの要望で、さらに「画会」について打診・相談が鶴三から寄せられ、それに対する返答として書かれたものであろう。

この書簡で注目すべきところは、当初は中里介山も「画会の件も至極おもしろい企」と思っていたという一事に尽きる。中里介山は、石井鶴三はもちろん、木村莊八にも好意的な意向を示しており、ネックとなっていたのが白井喬二である旨もはっきりと示されている。何といっても木村莊八の出品作品が、白井喬二「富士に立つ影」の挿絵だったのだ。挿絵画家一人には問題はない、しかし、「大菩薩峠」と「富士に立つ影」の挿絵が並置され、自身が白井喬二と同列に置かれることが「イヤ」なのだという。

してみれば、この書簡は、単に中里介山個人の考えを示すばかりでなく、この時期の新聞連載小説挿絵（画家）をめぐる諸問題が凝縮された、いわば時代の問題を体現した一通といえよう。

本稿のねらいは、こうした挿絵（画家）の社会的地位をめぐる大正末年の動向として見逃せない墨画小品展に照準を合わせて、石井鶴三宛西田武雄書簡を手がかりに、具体的な進行をまとめ、その過程に孕まれた当事者達の考え（のズレ）や挿絵に対する歴史的認識について考察をめぐらせることにある。

## 二、墨画小品展開催へと至る楽屋裏

本節では、研究史上においても情報の少ない墨画小品展<sup>9</sup>をめぐって、画廊サイドとして主催した西田武雄（室内社画堂）からの鶴三宛書簡を紹介し、解題を付しつつ、そこにどのような問題があるのかを明らかにしていきたい。信州大学蔵「石井鶴三関連資料」に残されていた、片面刷りの書きこみ入り展覧会案内については、以下に掲げておく（[書4-603]）。



[書 4-603] : 左



[書 4-603] : 右

書簡の検討に先立ち、まずは西田武雄という人物について確認しておく。

西田武雄にしだ・たけお

版画家

〔生年月日〕明治二十七年（一八九四年）七月一日

〔没年月日〕昭和三十六年（一九六一年）七月二十六日

〔出生地〕三重県「学歴」横浜商卒

六歳の頃横浜市の大川福松の養子となる。在学中の大正三年文展に初入選し、翌四年西田家へ戻る。七年本郷美術研究所に入り岡田三郎助に師事。一〇年中国へ旅行し、一一年帰国。一四年画廊「室内社」を開き、昭和一三年には広山インキ株式会社を設立。一八年恩地孝四郎らと版画奉公会を創立。同年室内社が戦災にあい郷里に疎開。画廊経営、日本近代美術の研究など多方面で活躍する一方、エッチングを独習してその普及に努めた。七年雑誌「エッチング」を創刊、門下からは駒井哲郎など多くのエッチャーが出ている。著書に「エッチングの描き方」<sup>⑩</sup>「画工志願」など。

信州大学蔵「石井鶴三関連資料」をみた限りでは、一番はじめの鶴三宛西田武雄書簡は、一九二五年九月のものである。

3、石井鶴三宛西田武雄書簡（仮番号「書4―604」）

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

九月にいりましたので

そろ／＼準備にとりかゝりたいと存じます、何分よろしく

御願いたします

葉書の宛先は、「市外板橋中丸二六五／石井鶴三様」、消印の日付は一九二五年九月三日、時間は午後時から九時、地名は日本橋。裏面は、室内社画堂の宣伝用に刷られたもので、横置き・右半分にギャラリイの様子がデザインされ、中央には「画堂新着品」という文字、左端には差出人名として「京橋区北横町日米信託ビル二階二一八／洋画、彫刻、版画 室内社画堂／西田武雄」と刷りこまれている。右の文面は、「画堂新着品」と差出人名のあいだのスペースに手書きで書かれたものである。

ここでは、具体的に何の準備か明示されていないが、おそらく墨画小品展のことを指すと思われる。そうであれば、すでに企画自体は双方で了解済みとなっており、三ヶ月ほど前に、西田サイドから促すかたちで準備がはじまったことになる。

4、石井鶴三宛西田武雄書簡（仮番号「書4―605」）

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

三日に下神して故芝川照吉氏の聚集品を拝見しました、十月には当方で売立をしたいと存じます、日本で最初の洋画の売立になると存じます、故青木繁の十五点、浅井忠の三点、柏亭の二十二点、リウセイの二十五点、（先生の三点、）繁次郎の二十二点等最もめばしいものです、

今月中には当方へ荷がつかますので御らん下さい、例の展覧会の方もそらく取りかゝることになりますので、近日中に御作を拝借に参上致します。何卒よろしく御願します、まだ多忙のため院展をみておりません、いづれお目にかゝり方々

葉書の宛先は、「府下板橋中丸／石井鶴三様」、日付は本文、消印ともに一九二五年九月一日、時間は読みとれない、地名は本郷。表面左下に「京橋区北横街／日米信託ビルディング内／室内社」のスタンプ印、その左下に手書きで「西田武雄」と記されている。

芝川照吉（一八七一～一九二三）は、明治から大正にかけて毛織物貿易で財を成し「羅紗王」とまで呼ばれた実業家で、日本洋画家の先駆的なパトロンとして知られる人物である<sup>①</sup>。芝川の死後、西田武雄はその遺品売り立てに関わった。第一回芝川照吉蒐集品売立展覧会（於室内社画堂、一九二五年一〇月二〇～二五日）は、主催が芝川亀太郎と西田武雄・室内社画堂、後援は石井柏亭と藤井達吉、出品目録点数は一三二点であった。

また、直接鶴三個人と関わりのある用件としては、墨画小品展を指すと思われる「例の展覧会」について「御作」、つまりは挿絵原画を取りにいく旨の連絡が記されている。

ちなみに、ここにいる「院展」とは、第一二回日本美術院展（九月三日～二九日）で、鶴三は石膏《浴女》を出品している。

#### 5、石井鶴三宛西田武雄書簡（仮番号「書4-607」）

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

女学校で先生のアダナをお絹様お銀様

なぞとつけていると云ふ小話が日日の夕刊（二十七日）

にてでておりました、面白いと思います

なるべく人物がいろく／＼出てくる様に

お願いします、中里介山先生の

お宅はどちらでせうか

一度お挨拶に上つておきたいと

存じます

葉書の宛先は、「府下板橋中丸二六五／石井鶴三様」、日付は九月二七日、消印の時間は午後七～八時、日付け・地名は読みとれない。表面左下に「京橋区北横街／日米信託ビルディング内／室内社」のスタンプ印、その左下に手書きで「西田武雄」と記されている。

前段の話題は、石井鶴三が挿絵を担当した新聞連載小説、中里介山「大菩薩峠」に関するものである。「お絹様お銀様」はいずれも「大菩薩峠」の登場人物名であり、当の新聞記事「小話」（『東京日日新聞』一九二五・九・二六夕、三頁）には次のようにある。

ある女学校で先生のアダ名にお銀様、お豊、お絹、道庵先生、米友、（但龍之介見当らず）（丰賛）

後段については、墨画小品展を念頭においた依頼・相談であると思われる。最終的に鶴三は、同展に挿絵原画二三枚を出品することになるのだが、「なるべく人物がいろく／＼出てくる様に」という西田の要望は、描かれた人物を偏らないように選んでほしい、というこ

とだろう。つまり、「大菩薩峠」の主人公・龍之介などばかりでなく、新聞記事が示すように、さまざまな人物が人口に膾炙していることをうけての、西田サイドからの要望とみてよい。また、同箇所からは、この時点では展示する挿絵を、ある程度にせよ鶴三が選んでいたことが確認できる。

最後に、この段階で、西田が中里介山に「挨拶」にいく予定だったことにふれておきたい。後にトラブルとして表面化するよう、「大菩薩峠」のヒットに伴い、中里介山は自らの著作権について敏感になつていた時期でもある。そうした状況もふまえ、西田は展覧会開催前に「大菩薩峠」の著者である中里介山にも「挨拶」を考えたのだろう。

#### 6、石井鶴三宛西田武雄書簡（仮番号「書7—1313」）

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

ほんとうに困りました。二三日うちにお目にかゝりたいと存じます。芝川氏の蒐集品が二百点到着しました。今更ながらなつかしい作品ばかりです、商売身よりがいゝとでも云ふのでせうか、ごらん方お出かけが願へれば幸甚です、今晚にも木村氏をたづねたいと存じます、先生のたゞを先にしてあとで木村氏と河の氏のももやつてみては存じますが、いでせうか、ともかく中里先生に私がお目にかゝりませう、その上で何か考へます、いろく心配下されて有難う

御坐います

葉書の宛先は、「府下板橋中丸二六五／石井鶴三様」、日付は切手下部に一〇月四日と記されている。消印は読みとれない。表面左下に「京橋区北横町／日米信託ビルディング内／室内社」のスタンプ印、その左下に手書きで「西田武雄」と記されている。

二行目から、売立展が計画されている芝川照吉収集品に関する連絡もみられるが、その後で語られているのは、冒頭の「ほんとうに困りました」以下、墨画小品展開催に関する中里介山とのトラブルとみて間違いない。西田は石井の他、木村莊八とも相談しながら、ことにあたるつもりのだが、複数の画家の作品を同時に展示する案や、実際には展示されることなかった「河の氏」（河野通勢だと思われる）の作品を展示する案などが、この時点では浮上していたことがわかる。

#### 7、石井鶴三宛西田武雄書簡（仮番号「書4—608」）

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

昨夜木村氏に「あ ミセケチ」「お 右傍挿入」めにかゝり色々とお配慮にあづかりました、ともかく私が一応中里先生をおたづねすることにいたします、その上で御返事いたしますが少しおくれる様になります、是非も御座ひません、芝川氏の聚集品は全部画堂へまいつておりますので是非御覧下さい、売立展は二十日より二十五日までと決定いたしました、明日は木村氏も画堂へおみへになり

ますので又御相談いたします、

先は御一報まで

草々

葉書の宛先は、「市外板橋中丸二六五／石井鶴三様」、日付は本文・消印ともに一九二五年一〇月七日、消印の時間は午後七〜八時、地名は日本橋。表面左下に「京橋区北横町／日米信託ビルディング内／室内社」のスタンプ印、その左下に手書きで「西田武雄」と記されている。

この文面によると、墨画小品展開催に関して、同じく出品予定者である木村莊八のもとを西田が訪ねて、何かしらアドバイスを受けたということになる。面談の帰結として、西田が中里介山のもとへ行くというのだから、相談も中里介山に関わる何かだったことは疑いない。おそらくは、鶴三が「大菩薩峠」挿絵を展示することに関して、時間をかけても解決すべき問題があったということになる。一〇月六日に面会した木村莊八が、八日には画堂へ来るのでまた「相談」するというのだから、喫緊の懸案事項という認識があったものと思われる。

また、芝川照吉の遺品売立て会について、進捗状況と開催期間についての連絡も添えられている。

#### 8、石井鶴三宛西田武雄書簡（仮番号「書4―606」）

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

お蔭様で芝川氏の売立展も成績よく終わりました、この次は先生のをやりたいと存じます、来月十五日頃に

はじめたいと存じます、いづれ御参しまして御相

談申上げる心算で御座いますが目下はあとか

たづけで一吋と手をはなしかねております、

キヤリ節はお届けいたしておきました、

この次は大いに御力添へをお願いいたします、

十月二十九日

西田武雄

葉書の宛先は、「市外板橋中丸二六五／石井鶴三様」、日付は本文にある通り、一九二五年一〇月二十九日（消印は九月三〇日）、消印の時間は午後二〜三時、地名は日本橋。表面左下に「京橋区北横町／日米信託ビルディング内／室内社」のスタンプ印、その左下に手書きで「西田武雄」と記されている。

先の書簡（仮番号「書4―605」）から一ト月余りたち、話題になつていた芝川照吉遺品の売立て会は首尾よく終わつたようである。「この次は先生のをやりたい」というのは、墨画小品展を指すと思われる。はじめの日としてあがっている「来月十五日頃」は厳密にとれば一月一五日を指すはずだが、そうであれば、実際には予定から丸一ト月遅れて開催されたことになる。あるいは、一〇月末だったこともあり、葉書執筆時点が一月のつもりで「来月」と書いたのかも知れない。いずれにせよ、室内社（西田武雄）にとつては、芝川照吉の遺品売立て会につづくイベントとして、墨画小品展が捉えられていたようである。

なお、ここでの「キヤリ節」については未詳。

#### 9、石井鶴三宛西田武雄書簡（仮番号「書4―609〜12」）

仮番号「書4―609〜12」の四通は、それぞれ表面の切手の

下に「第一」〜「第四」と記されており、文面も一連のものである。従って、一括して翻字を示し、まとめて解題を付すことにする。

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

(第一、「書4—609」)

あの夜中里氏をお尋ねしましたが御留守でした、昨夜御目にかゝる事が出来ました、別々にやるなら先生のを先にやれとのお話でしたので承知して帰りました、木村氏のをあとからやる様にきめました、いろいろの挿画をまぜてのお話も御座いましてが

画商にも挿画を撰たくするだけの権利は御座います  
見わたしたところ挿画らしいものは見あたりませんので寧ろ挿画としてよりも立派な芸術として画堂へ列へましていただくものかないかに考へます

(第二、「書4—610」)

先生が色々御考へになるのも石井先生の挿画を愛せらるゝ所為とも拝察いたしました、ともかく中里氏の御承にんを得たからには私に御一任を御願いたします、私のやり方のよくない場合は責任

を負ふつもりで御座います、

それに中里先生にも御話申上ました、それですから今月中に先生の原稿をいただいて来月五日頃からやりたいと存じますが如何でせうか

(第三、「書4—611」)

二十三日頃にもう一度御邪まして先生の草稿の中から私にゑらばしていたきたいと存じます  
同時に既刊大菩薩の挿画が四五枚中里氏の宅にありますのでそれも同時に展覧したいと存じます、  
中里氏も一二枚御所望の趣をうけ給りました、ともかく先生のを先にやらしていただきたいと存じます、

(第四、「書4—612」)

木村氏のものには目下表具やにやつてありますが先生のを今月中に表具やの手に渡したいと存じます  
一二の画商の営業ではなく

画壇からみた草画マと

しての立場をこの私に主張させて

いただくことになりはしまいかと存じます、  
いづれお目にかゝつて委しく

草々

以上四通の葉書は、まとめて書かれ、同時に投函されたものと思われる。従つて、以下の情報は四通共通である。宛先は、「府下板橋中丸二六五／石井鶴三様」、日付の消印は一九二五年一月一七日、消印の時間は午後六〜七時、地名は京橋。表面左下に手書きで「西田武雄」と記され、その上部に「第一」〜「第四」と添えられている。

内容について、細かくは多岐にわたるものの、一貫しているのは墨画小品展開催を念頭においた、中里介石とのやりとりである。この時点で、西田は中里介石との対面を果たし、おそらくは「大菩薩峠」挿絵の展示について「御承にんを得た」(第二)ということだろう。逆にいえば、そこに至るまでに、一定の困難があったことを裏書きしてもいい、それゆえ「責任」(第二)といった文言がみられるものと思われる。

墨画小品展開催までの具体的なプロセスについては、本稿で紹介している一連の書簡以外にはほとんど情報がないため不明な点も多いが、この時点では、石井鶴三と木村莊八を時期的にずらし、鶴三のもの(のみ)を先に開催する線で話がまとまりつつあったようだ。実際の開催期間より五日早い「来月五日頃」(二月五日を指す)が検討されているのも、おそらくは中里介石の意向を受けながら調整した結果だと思われる(ちなみに、同展には小杉未醒も出品しているはずだが、この時点で名前はみられない)。

また、展示挿画の選択については、「画商にも挿画を撰たくするだ

けの権利は御座います」(第一)・「私にゑらばしていたきたい」(第三)などと、自らが積極的に関わる姿勢を示している。

さらに、第一・第四からは、挿絵を本絵に対する劣位項としてではなく、「立派な芸術」と意味づけることを目論む、画商としての西田のアグレッシブな姿勢をみることもできる。してみれば、やはり本展は従来の挿絵史・美術史に一石を投ずることをも企図した、すぐれて戦略的な企画とみるべきだろう。

10、石井鶴三宛西田武雄書簡(仮番号「書4-613」)

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

昨日は色々と御高配にあづかり深謝仕り候

ともかく開催を決定安堵仕り候

先生のは来月十五日頃より一週間

木村氏のは二十五日頃より一週間

位と相定め申候間

何卒共に御力添へ下され度

本月々末に使ものまいらせ候間

お作品御渡し下され度、表装屋

約二週間を要し候間左様御願申上度

先は御礼旁々御願まで 草々

葉書の宛先は、「府下板橋中丸二六五／石井鶴三様」、日付は本文・消印ともに一九二五年一月二四日、消印の時間は午後一〜二時、地名は読みとれない。表面左下に日付けがあり、つづいて「西田武雄」と署名されている。

何より重要なのは開催が「決定」に至ったという文言である。これは、裏を返せば、これまで企画は進行しつつも、不安定な状況が二ヶ月ほど続いていたということでもある。

この段階では、墨画小品展開催時期に関して、石井鶴三作品を二月一五日から、木村莊八作品を二月二五日から、それぞれ一週間、ということの話が進んでいる。鶴三に関しては、すでに展示作品も決まっているようで、表装スケジュールの具体的な連絡も付されている。(ここでも、小杉未醒の名前は出てこない)

11、石井鶴三宛西田武雄書簡(仮番号「書4-614」)  
書簡本文の翻字は、以下の通りである。

清水の次郎長とび出しまあ〜と云つた  
具合で甚だ以つて大成功木村氏も大いに

喜はれ乗気いたされ居りし候間何卒

馬力を御願申上候本日アトリエ社

まいり略画号(「二字不明 ミセケチ」正月号)へ

先生のもとと木村氏のもと

小杉先生のことを写真にて

いれることに相成り本日撮影

すみと相成り候先生のもは小生の

大すきなるはんぺん、ぼうずを入れ、

木村氏の「益満」の方へは「山路」を入れることに

きめ申候、先は御一報旁々御願まで

葉書の宛先は、「市外板橋中丸二六五／石井鶴三様」、日付は本文・

消印ともに一九二五年一月二八日、消印の時間は午後八〜九時、地名は京橋。表面左下に日付けがあり、つづいて「西田武雄」と署名されている。

「清水の次郎長」とあるのは、先に示した書簡「書4-603」によれば、小杉未醒が講談に付した挿絵原画を指すと思われる。

雑誌『アトリエ』誌上では、一九二六年一月号「別刷口絵」欄に、石井鶴三「はんぺん坊主月見寺に走る」(大菩薩峠挿絵)、小杉未醒「新平・五蔵の出合」(清水の次郎長挿絵)、木村莊八「朱門道場の立合」(富士に立つ影挿絵)が各二頁で掲載されている。また、同誌同号の「美術界消息」(一九三三頁)には次のような記事も掲載されている。

▲未醒、鶴三、莊八墨画小品展

十二月十五日より十日間、京橋日米ビル二階室内社画堂。莊八氏は報知所載「富士に立つ影」の挿画二十点。未醒氏は伯山講演の清水次郎長、二十点。鶴三氏は東京日日所載「大菩薩峠」挿画二十点。

実際の出品点数とは異なるが、三人展として開催されたことは確かだ、それがこの号の編集に間に合うタイミングで確定していたこともうかがえる。



三 鶴 井 石

(畫 神 師 薩 著 大)

る 來 に 寺 見 月 主 坊 人 べ ん は

『アトリエ』掲載の「はんぺん坊主月見寺に走る」

© Keibunsha, Ltd. 2015/JAA1500047

12、石井鶴三宛西田武雄書簡（仮番号「書4-615」）

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

昨夜は失礼。ともかく、気にしてもしかたがない  
考へ方に巨離<sup>ママ</sup>があつてはものにならない。

本日、日日の青柳氏来り写真をとる、

一兩日中に新聞へ出ると思います、

新聞はみんな好感をもっているのに

さてもさてもいみじきお大

なる哉

本日、先生の分、

8、9、10、11、12、13、14、17、23、

売約、木村氏の傘の雪と、6売約、

主なる参□社、坂井犀水氏、其他、

入場約七十名（本日の朝日新聞に清方氏

先生の作、ゲキ賞一読ありたし

第一信

葉書の宛先は、「府下板橋中丸二六五ノ石井鶴三様」、日付は本文・

消印ともに一九二五年二月一五日、消印の時間は午後六〜七時、

地名は読み取れない。表面左下に日付けがあり、つづいて「西田武

雄」と署名されている。

「失礼」が具体的にどのようなことを指すのかは不明。

その他の連絡事項としては、日日新聞記者が取材に来たこと、売約済みとなった鶴三作品および木村荘八の作品、さらには入場者数である。ちなみに、前後する時期の『東京日日新聞』には、まず「学芸消息」欄（一九二五・一二・一五、四頁）に「▽墨画小品展 木村荘八、小杉未醒、石井鶴三の三氏は各二十点づつを出品して十五日より十日間京橋日米信託ビルで」と報じられている。さらに、会期中に山下新太郎「鶴三氏の挿絵」（『東京日日新聞』一九二五・一二・二二、四頁）が掲載される。長くなるが、以下に全文を引用しておく。

石井鶴三、木村莊八、小杉未醒三氏の挿絵原画展覧会が十五日から十日間京橋北横町の日米ビルの二階で催されてゐる。尤もそれには原画といつても一度版にされた絵を各画家が再びそれと同じものを画仙紙に描き或ひはそれに淡彩を施しなごとして鑑賞用の絵としたものである。

然し数ある挿絵の中三氏が最も会心の作とされるものゝみを選んで石井氏が廿三点、木村氏が十九点、小杉氏が十二点出品されたものであるだけに何れも力の籠つたすぐれたものゝみである。その中でも石井氏の作品は、悉くすばらしき出来栄で、「龍之介とお若炉辺」「福村女軽業の楽屋に来る」「與人両国橋」「駒井と支那少年」などは殊に傑作である。「龍之介弁信を斬らんとす」は細い白描線で描かれてあるが、言と言が互ひに勘で相手を倒さうとする意気が両者の眉字の間に現はされてゐて見て居ても胸がすくやうに思はれる。

× × ×

石井氏は数年前に、確か上司小剣氏の小説にも挿絵を描いて居られたやうに記憶するが、あの頃の氏の絵は多分なユーモラスな味の方が勝つてゐて、またほんたうの処に打つかつて居られない気がしたが今度の「大菩薩峠」の挿絵は維新前後の事象が、作者の持つ或る物とびつたりと合つたためか、水も洩らさぬ美事な出来を示してゐる。

また、「朝日新聞」云々とあるのは、鎗木清方による「学芸一年回顧と展望(十一) 今年の美術界【二】」(『東京朝日新聞』一九二五・

一一・一五、五頁)を指す。ここでは石井鶴三について、次のような言及がみられる。

石井氏の風俗画は当代で珍重すべきものである。よく世間で一流といふ語を用ゆる、画商の展覧などに用ゆる一流は、あれはあめは一流太白練、いづれは縁日ものゝ一流だが、厳格な意味で一流といふのを吟味すると、世間周知の一流は将棋倒しに失格しやう。石井氏の風俗画はそんなでない本格の一流である。つゝましやかなユーモア、ちつとも画格を落さないで上品ぶつてはゐない。ことしのは矢ガスリのやうな描法が気になつて、少しスツペリし過ぎた嫌ひがあつたが、今回回想してみると、あの浴みしてゐる二婦人など、やつぱり良い筋の風俗画だ石井氏のもので本年の収穫として推賞したいのは大菩薩峠のさし絵だ。あれはいつから出始めたか忘れたが、殊によつたら去年だつたかも知れないが、初めの方ですすきの原にびわを背負つてゐる座頭、闇の中に結び髪の女の立つてゐるのだが、囲炉裏の傍にづきを冠つて刀を杖にしてゐる机龍之介など、いづれも三四寸に過ぎぬものながら、一々玩味しうむむことを知らぬ佳品であつた。

13、石井鶴三宛西田武雄書簡(仮番号「書4-616」)

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

十五日夜、御揃にて御来社の由、深謝、

昨日、木村氏来訪。署名調印すみ。

白井喬二氏参。よみうりに何かかく由。昨日の



できる（実際の参加者等については未詳）。

14、石井鶴三宛中里介山書簡（仮番号「高1—15」）

今日山より帰来 お手紙拝見。

もう一応小生の意志を申上げて置きます。

今回の小生の所見は画家としては貴下の人格

を信じて作物としては或物との並列を嫌つたので  
す。

現時の文壇のある空気には小生の作物を誣いん

として一種のたくみを持つ者が多い。小生は彼等の

卑劣を一悪「ミセケチ」にくんでゐる。——これは決してひがみ  
ではない。

小杉氏が講談物を執筆する動機は知らないが、「改ページ」

若し同君が「西遊記」の如きものを執筆して個々

の人物を表現させたら非常に面白からうと思ふ。

それでもあつたら小生も首肯したかも知れない。

バクチ打ちだか侠客だかさういふものを描いて何の

抱負があるのですか。オレほどの大家が斯うい  
ものを執筆して見せるといふフザけた気持なら

論外です。

兎に角小生は作物を他の目的の為に利用されるこ

とを絶対に不可とします。

今回の事は貴下の人格を信じたもので貴下の「改ページ」

為ならば甘んじて縁の下の力持でも何でもつとめ  
やうと思つた精神が西田にわからなかつたので  
す。

今後はどうか此の点を御諒察下さい。小生は

読物とする以「不明一字「ミセケチ」外には演劇、映画、その他す

べての

複製を謝絶してゐます。

西田には何を云つてもわかるまいから貴下にだけ

これを申上げて置きます。先は

十二月十八日

中里生

石井様 侍史

宛先は、「市外板橋中丸二六六／石井鶴三様」、日付は本文・消印と

もに一九二五年一月一日、消印の時間は午後一〜二時、地名は

早稲田。裏面には、十二月十八日と日付が記され、左下に「東京牛

込早稲田／鶴巻三百／中里彌之助」と朱印で住所が捺されている。

日付けからすれば、すでに墨画小品展は開催中ということになる

が、それでも中里介山は、不快の念を隠さずにいる。逆にいえば、

直接・間接的に批判されている、小杉未醒や西田武雄には（理解さ  
れそうにないから）いわないにせよ、鶴三には、そうした内意をも

らしている、ということでもある（「貴下にだけこれを申し上げて置

きます。」）。主旨としては、本稿一でとりあげた書簡「高1—23

a」同様、自身の作品（ここには、鶴三による「大菩薩峠」挿絵も

含まれるはずだ）が、低俗なものと並置されることを、よしとしな

いという明快な態度表明である。

## 三、その後の西田武雄との関係

表面的な盛況の裏でトラブルもくすぶっていた墨画小品展。

その後、石井鶴三と中里介石との間では、挿絵著作権をめぐる「挿絵事件」(一九三四)と称されるトラブルが表面化してしまふ。一方、石井鶴三と西田武雄との関係はどのようなものだったのだろうか。結論からいえば、良好な関係がづいていったものと思われる。

たとえば、昭和初年の日記を参照すると、一九二九年、「一月九日(水)」の項には「帰りに室内社によつて見る ここでも西田氏在宅運のよい日である しばらく話して帰る」、「九月九日(月)」の項には「室内社をたずね西田君在宅しばらく話して、多田君略歴を借りる」、などといった記述がみられる。<sup>(12)</sup>

また、信大蔵「石鶴三関連資料」からは、その後の、両者の関係がうかがえる書簡が一通発見されている。

15、石井鶴三宛西田武雄書簡(仮番号「書2-226」)

拝啓

拙著画志願者諸先生から好評を得ておりますので、気をよくしています。就ては春陽会雑誌へ広告を出しておきましたが、先生の御紹介の一文を同誌へ御掲載願へますればこの上もない

幸と存じます。広く画学生の方々に読んでいたきたいと思つ

ております。「エッチング」も皆様の御助力によりまして日増しに成長

して行きますので喜んでおります。先生にも是非エッチングをお初め下さることをお推めいたします。高村光太郎先生も積年の素描を全部エッチングにしたいとの御手紙をいただきました。

春陽会研究所のおかへりにでも御立より願へますればこの上

もありません、右お願ひまで

西田武雄

石井鶴三先生

侍史

昭和八年三月二十七日

宛先は「板橋区板橋町三丁目三六六／石井鶴三先生／侍史」、日付は消印・本文ともに一九三三年三月二十七日、消印の時間は読みとれない、地名は麴町。裏面中央には「東京市麴町区麴町二丁目十二番／洋画、彫刻、版画 室内社画堂／西田武雄／電話九段(33)〇五一四／振替東京三四四八八」と刷られ、その右側に「三月二十七日 西田武雄」と直筆で添えられている。

本稿では、主に画商として紹介した西田武雄は、二節冒頭で確認したように、エッチング普及に努めた人物としても知られ、一九三二年には『エッチング』を創刊してもいる。鶴三も関わっている『春陽会雑誌』にも広告を出しており、その広告文を鶴三に依頼するというのが、右の書簡の要件であった。逆にいえば、仕事・芸術を介してではあるけれど、両者の交友はづいていたとみてよいだろう。そのことは、西田が鶴三にエッチングを勧めている件に読みとれる。

また、西田武雄は『エッチング』を介して高村光太郎ともつながっていたようで、鶴三と光太郎との親密な関係を想起すれば、そうしたことを踏まえての文面であったことから、この時期における

西田の芸術家との人間関係の一端もうかがえる。

†

最後に、本稿冒頭で掲げた挿絵という問題領域に話題を戻しておくならば、大正末年の代表作を契機に、石井鶴三は挿絵画家として文字通りの第一人者としての活躍をつづけ、最晩年まで請われて挿絵を描いた。そう考えれば、新聞（連載小説掲載誌）という日常的な場だけでなく、その挿絵を展覧会という場に供した墨画小品展、さらにはそれを仕掛けた西田武雄とは、挿絵画家・石井鶴三にとつて、欠くことのできない意義を担っていたと思われる。それは、挿絵を芸術として扱う、という振る舞いによって果たされた、挿絵の芸術化をめぐる歴史的な一コマでもあった。

## 注

- (1) 匠秀夫『近代日本の美術と文学』（木耳社、一九七九）、拙論「挿絵画家・石井鶴三とその評価」（信州大学附属図書館編『時代小説作家と挿絵画家・石井鶴三』展・資料集）信州大学附属図書館、二〇二二）参照。
- (2) 上司小剣『東京』に関する石井鶴三との関係については、荒井真理亜「上司小剣『東京』（四部作）の成立過程——上司小剣宛石井鶴三書簡の紹介」（『日本近代文学館年誌 資料探索』第七号、二〇二一）・「上司小剣『東京』〈愛欲篇〉の新聞連載の事情——信州大学所蔵石井鶴三関連資料から」（『信州大学附属図書館研究』第二号、二〇二一・三・一）を参照。
- (3) 三木多聞「大正末期の石井鶴三」（『石井鶴三全集 第二巻』形象社、一九八六、五〇七頁）
- (4) 西村清和『イメージの修辭学 ことばと形象の交叉』（三元社、二〇〇九）
- (5) 木村荘八「挿絵と本絵」（『明治大正昭和挿絵文化展記念図録』日本電報通信社、一九四一／引用は『木村荘八全集 第二巻』講談社、一九八二、二二二頁）には、「大体誰が拵えた言葉かわかりませんが、挿絵というものがあつた。これに対する対照的な言葉として本絵という言葉が行われて居るようでもあります。本絵というのは、まあ本当の絵という意味だと思います。決して正確な言葉ではありません。併し乍ら一般にそれが行われて、挿絵に対する本絵と申します。／具体的に言うると、新聞や雑誌にいろいろ絵を描いて居るのが挿絵家、それから上野の展覧会を通じて仕事をするのが本絵師というのが妙な区別がいつの間にか生じて来た。」という一節がある。また、小杉放庵「挿絵」（『放庵画壇』中央公論美術出版、一九八〇、一七七・一七八頁）には、「挿絵と本画を別にして考える、本画は第一義的で挿絵は第二義的、とすることも如何な話、挿絵にも第一義第二義あり、本画にもピンからキリまであり、挿絵は独立せず、それ故等級を低うするものと考えたこともあつたが、真に独立した美術というもの少なく、玉葱とガラス壺に興を催した絵、おさん茂平の浄瑠璃に形を寄せた挿絵、二つながら同一線に立ち得て障りないであろう、ミケランジェロの最後の日や、ヴィンチの最後の晩餐は、あれは畢竟聖書の挿絵だが、あれを第二義にするとすれば、世間の相場は第二を以て第一の上に置くであろう。」という一節が読まれる。また、鶴三の挿絵に対するスタンス・位置づけについては、拙論「石井鶴三宛書簡の整理をはじめ——挿絵（画家）から近代文学・出版（研究）を考え直すために」（『信州大学附属図書館研究』第一号、二〇二二・三）参照。
- (6) 石井鶴三「自序」（『石井鶴三挿絵集 第一巻』光人社、一九三四、二九・三〇頁）には、「けれども、中里氏のこの謬見は今にはじまつたことでなく、既に大正十四年の冬、小生が大菩薩峠挿絵の原画を、展覧した時にさかのぼるのであります。」という一節が読まれる。
- (7) 紅野謙介「新聞小説と挿絵のインターフェイス——一九二〇年代の転換をめぐる」（『岩波講座文学2メディアの力学』岩波書店、二〇〇二）参照。

- (8) トラブル以前の、中里介山と石井鶴三のコラボレーションについては、拙論「大正末における石井鶴三と中里介山の関わり——雑誌『婦人之友』と「小野の小町」挿絵をめぐる」(『信州大学附属図書館研究』第二号、二〇一三・一) 参照。
- (9) 石井蹊子・長原ルリヤ編「年譜・書誌」(石井鶴三『山精』形象社、一九八三、一六五頁)には大正一四年の項に、「二月、京橋室内社画堂において木村莊八(富士に立つ影)小杉未醒「講談清水次郎長」石井鶴三(「大菩薩峠」原画展開く。」と、小高志郎・槌田満文・三井永一編「年譜」(『木村莊八全集 第八巻』講談社、一九八三、三八八頁)には、大正一四年の項に、「小杉未醒、石井鶴三と挿画展(十二月十五日〜二十四日、室内社)を共催。」という記述がみられる。
- (10) 日外アソシエーツ株式会社編『美術家人名事典 古今・日本の物故画家三五〇〇人』(日外アソシエーツ、二〇〇九、四四九頁)
- (11) 芝川照吉に関しては、佐々木静一「近代日本絵画初期のパトロン芝川照吉 I〜IX」(『三彩』第四三六〜四四二、四四四、四四七号、一九八四・一〜七、九、一二) 参照。
- (12) 『石井鶴三日記 I 第一巻』(形文社、二〇〇五、四三四頁、四五二頁)
- (13) 出口智之「高村光太郎と石井鶴三——信州大学蔵新出高村光太郎書翰から」(『信州大学附属図書館研究』第一号、二〇一二・三) 参照。

※本稿で紹介した鶴三宛書簡の翻字にあたっては、荒井真理亜氏・高野奈保氏・多田蔵人氏・出口智之氏の多大なお力添えを頂きました(もちろん、本稿の文責は松本にあります)。また、小杉放菴の日記の閲覧・引用については、小杉放菴記念日光美術館及び同館学芸課の田中正史氏にたいへんお世話になりました。ここに記して謝意にかえさせていただきます。